

2023 年 3 月 1 日

2022 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
修士論文

**自宅待機のオンコール勤務をする手術室看護師の
勤務継続に繋がる労働環境**

—半構成的インタビューによるデータを用いた質的記述的研究—

**Working Conditions that Support the Retention of
On-Call Shift Operating Room Nurses
Who Wait at Home**

**Qualitative descriptive research
using data from semi-structured interviews**

21MN015

氏名 桑原舞

要旨

【目的】自宅待機のオンコール勤務を行う手術室看護師にとって、勤務継続することに繋がる労働環境について明らかにする。

【方法】研究デザインは、質的記述的研究とした。2次救急医療体制の病院で、手術室勤務を4年目以上かつオンコール勤務を1年以上行っている看護師9人を対象とし、半構成的インタビュー法を実施した。4つの項目である勤務上の工夫、勤務継続に繋がる要因、オンコール勤務の課題、望ましい労働環境に関連した内容の最低限のまとまりに作りコードをつけ、比較検討しながら融合し、4つの項目ごとにサブカテゴリ、カテゴリ、コアカテゴリを生成した。分析結果をもとに、自宅待機のオンコール勤務を行う手術室看護師の勤務継続に繋がる労働環境について考察し記述した。

【結果】【看護管理者がオンコール勤務を意識した勤務計画表を作成する】、【部署内でオンコール勤務を意識した人材育成、役割分担、業務規程を整える】、【勤務中・勤務後の休憩・休息確保に取り組む】、【業務の一部を別部署に移管し、オンコール勤務で行っていた業務の負担を軽減する】、【勤務者の一部をオンコール体制から夜勤体制に変更し、オンコール業務の負担を軽減する】という勤務上の工夫をしていた。【多様な手術に対応できる手術看護実践能力を獲得する】、【手術室に対して帰属感が生まれる】、【個人の生活をオンコール勤務の特性に適応できる】、【オンコール勤務に順応する】、【時を選ばず手術を要する患者にとって不可欠な働き方だと認識する】、【手術看護実践能力の向上を自己認識できる】、【オンコール勤務により満足 of いく賃金を得る】ことを勤務継続に繋がる要因と考えていた。【長時間労働の疲労から回復しづらく勤務中に危険を感じる】、【常に仕事であるような拘束感を抱いて待機する】ことをオンコール勤務の課題と捉えていた。望ましい労働環境は、【手術室に配置される人員が増加する】、【安全で高度な手術看護実践を行う人材を育成できる教育体制を構築する】、【疲労が蓄積しない勤務体制とする】、【業務に対する過度な重圧感に配慮する】、【オンコール勤務の賃金が上昇する】、【オンコール勤務から夜勤に変更する】、【他部署や多職種と連携する】、【仕事と生活の調和がとれる働き方を選択できる】、【手術看護実践への認知度が上がる】と考えていた。

【結論】手術室看護師が勤務を継続するには、自宅待機中を含めた心身の負担を軽減するために休息が確保できる労働環境が望ましいとされた。そのためには人員増加が必要であるため、オンコール勤務体制での人員配置基準を明らかにすることが求められる。